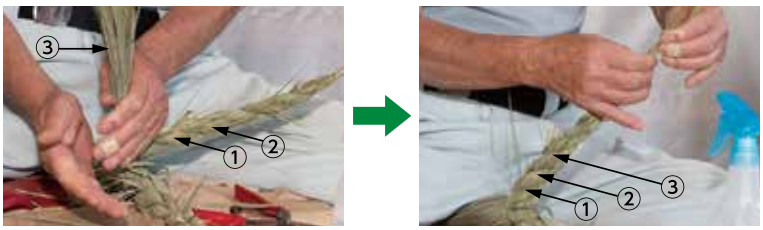
広報津山12月号
2021（令和3年）
No.805

編集・発行
津山市企画財政部秘書広報室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520
☎0868-32-2029
FAX 0868-32-2152
✉ kouhou@city.tsuyama.lg.jp

広報津山は、環境保護のため再生紙と植物性インキを使用しています。読み終えた後はリサイクル（雑紙）にご協力ください

広報津山 電子版
津山市公式 フェイスブック
津山市公式 LINE
津山市公式 インスタグラム



▲3本で縄をなう様子。まず2本で縄をない、もう1本をより合わせる

津山の人・物・技術など、明日誰かに自慢したくなる津山のいいところを紹介します

12 つやまじまん

えええとこいっぱい 津山自慢

特色ある「お飾り」を受け継ぐ
中島昭治さん 千恵子さん（下田邑）

田邑地域には、他の地域とは少し違うお飾りが伝わっています。昭和40年頃まで盛んに作られ、販売されていたという「田邑型」のお飾り。高齢化などで生産者が減る中、今も販売を続ける中島さん夫妻に、お飾りの特徴や思いを聞きました。

戦前から続く独特な形

一般的な眼鏡型のお飾りは、ワラの束を左右に分け、それぞれを2本に分けて縄状にします。「『田邑型』は左右を3本ずつに分け、2本を縄にした後もう1本をより合わせます。左右の縄を輪にする時、少し内側に閉じるようにするのも特徴」と語る昭治さん。約45年前に地域の人から教わり、作り始めたそうです。

昭治さんが縄をない、形になったお飾りに、水引などを飾り付けるのは千恵子さんの役目。「商店などに卸すものと直接知人や友人に販売するもの、合わせて千個ほど作ります。大きさが5種類あり、『のれん』や『えび』などの違う形も、少しですが作っています」。

お客さんに喜ばれるものを

7月下旬に、お飾りに使う稲を青刈りします。「以前は米の収穫後のワラを使っていましたが、色が青いものを好む人が多いので、10年ほど前から専用に育てています。途中で色が悪くならないよう、乾燥時間を調整したり、冷蔵庫で保存したりします」。

ワラを乾燥させた後、10月から本格的に作り始め、最も忙しくなるのは12月。昆布、ダイダイ、ホンダワラなどの縁起物を仕入れ、飾り付けます。

「あまり早く準備すると傷んでしまう。きれいなお飾りで気持ちよく新年を迎えて欲しいので、出荷直前に飾り付けます。ウラジロは、お飾りの大きさに合ったものを、山で探して採ってくるんですよ」と、こだわりを語ります。他にも、ダイダイが落ちないよう水引で包むように取り付けるなど、「田邑型」の形を守りながら、より喜んでもらう工夫を重ねています。

伝統を次の世代へ

現在「田邑型」のお飾りは、自宅や身内用に作る人はいるものの、販売用に数多く作っているのは中島さん夫妻だけだといいます。

昭治さんは「お飾りが好きだから、続けることができます。お飾りを求めてくれる人のため、もっと良いものを作り続けたい」。千恵子さんは「地域の中で、お飾り作りの講習会をしたいと思っています。他の地域から『田邑型』のお飾りを作りたいと、勉強に来たグループもありました。若い人や子どもたちに田邑の伝統を知ってもらい、引き継いで欲しい」と、笑顔で話しました。

つぶやき編集室

津山自慢の写真で中島さん夫妻が持つお飾りは、5種類のうち二番目に大きいもので、玄関に飾る人が多いそうです。一番小さいものは、水神様や自動車にちょうど良い大きさ。今まで車にお飾りを付けていませんでしたが、年末に飾って、新しい年も無事故で過ごせるよう、気持ちを切り替えたいです。（☆）

歴史あらかるとのコーナーで古い写真を紹介する際は、写真の現在の場所を探して撮影します。今回与えられたヒントは「美作加茂駅ではないか」という話と写真。現地を歩き回るもしっくりこず、地元の職員に聞き、たどり着いたのが美作河井駅でした。ちょっとした謎解き取材の結果は正解でしょうか。（♪）

「自分に価値あるモノ」「人とのつながり」「師と仰ぐ人の元へ」。特集記事は3人の農業者を軸にした内容です。挫折を経験し、そこから立ち上がる姿、その強い意志を記事にしたい…。このような気持ちで作りました。記事を通して感じた「乗り越えられない試練はない」。この言葉を胸に新年を迎えたいです。（三）